

学校部活動をとりまく環境と民間スポーツクラブの連携

佐々木 創*

Environment and cooperation of the private gym to surround school club activities

Sou SASAKI*

Key words : 部活動 Club activities
民間スポーツクラブ Private gym
ブラック Black (Harassment)

1. はじめに

皆さんは「ブラック部活動」という言葉をご存じだろうか。2016年8月1日にNHKの番組『クローズアップ現代プラス』で『「死ね！バカ！」これが指導？～広がる“ブラック部活”～』が放映され、社会問題となっている。生徒と保護者、教員を長時間縛り付け追いつめる、いわば部活ハラスメントとも言える現状が浮き彫りにされた。

部活動は国語や社会と違って、教育課程に位置付けられておらず、文部科学省が定める学習指導要領には「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものである」「(部活動は)学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と記されている。そのような位置付けの部活動が、なぜ「ブラック化」してしまうのか？

そこで、生徒保護者側・教員側の双方向の観点から、部活が「ブラック化」している原因を考察するとともに、学校と民間企業の連携により「ブラック化」の解消に繋がる方向性を模索する。

2. 生徒と保護者の立場から

生徒が部活動を苦痛だと感じる原因は、「部活

が厳しすぎるので楽しくないし、友達と遊ぶ時間もないから」であると単純に推測する。そんな理由で片付けられるのなら社会問題にならないだろう。現実として、ほんの一握りの事例であると思われるが、厳しいを乗り越えたハラスメントまがいの指導を行っている顧問がいるのも事実である。これが「ブラック」と言われる所以ではなからうか。前述の番組では、教育現場として信じられない「ブラック」なケースが放映されていた。公立中学校に通う息子がいる女性の証言である。

『野球部に所属する息子から、顧問の先生が怖いと聞いて練習を見に行ったら、衝撃の光景を目にする。ボールを取り損ねただけで、長時間の土下座を命じられる息子の姿であった。みんなの前でこんなことをやらされ、恥ずかしい思いをした事でしょう。土下座や平手打ち、長時間の走り込みなど、顧問の理不尽な指導法に疑問を持った母親は、この日以降毎日のように見学を続けました。すると、こうした体罰は日常的に行われている事がわかりました。見かねた母親が学校に訴えたところ、まもなく体罰は改善されました。しかし代わりに、耳を疑うような暴言が生徒たちに浴びせられるようになったのです。容赦のない個人攻撃。エスカレートする暴言に耐え切れず、不登校になる生徒も出ました。息子に部活を辞めるよう勧めましたが、野球が好きだからと、今も続けています。体罰が暴言に変わっただけで、子ど

*東北女子大学

もたちの苦痛は全く変わらない。怒りは収まりません。毎日暴言を吐かれて、半殺し状態。今日はどうぞグラウンドから追い出されませんように、最後まできちんと練習ができますように、ひどく怒られませんように、もうそれだけを願っています。』

ごく一部の指導者ではあると思われるが、教育現場にあるまじき言動ではなかろうか。部活動の本来の趣旨は、自主的及び自発的な活動である。「楽しそうだから」「みんなやっているから」「そのスポーツ（活動）が好きだから」といった興味本位で部活を始めてみたけれど、いざ活動してみたら理想と違った・・・部活をリタイヤする生徒の、辞める理由の大半が上記である。しかし、部活動をなかなか辞める事の出来ない生徒が多いのも、実情である。「部活をやめたら陰で悪口を言われる」「脱落者扱いされ、SNSなどで陰口があつという間に拡散される」という理由で不登校になる生徒も出ている。

文部科学省は運動部の休養日を週2回以上設ける事を勧めているが、実際はその逆で、週に1回しか休めない生徒が年々増加し、8割近くまで達している統計も発表されている。

なぜ顧問がブラックな指導をするのかの原因として挙げられているのが、「技術的な指導力不足」ではないだろうか。本業はあくまで教員である為、競技の指導力不足は否めない。例え現役時代にインターハイなどに出場した経験がある顧問でも、指導方法を学んできた訳ではない。指導のプロではなく、あくまでも教員なのである。そこで必要になってくるのが、指導のプロを擁する民間のスポーツクラブである。民間のスポーツクラブは、経営維持の為、利益を求める。暴言や体罰のようなブラックな指導を行えば、通う生徒がいなくなり経営が成り立たない。故にブラックな指導は行わないのである。仮にブラックな指導をされた場合、学校というコミュニティではないので、生徒や保護者の判断で退会を選択する事が出来るのである。また、違う学校の生徒が集まる為、普段の学校生活では得る事が出来ない人間関係の形

成にも繋がる。

私自身10年間民間のスポーツクラブで勤務しており、水泳・器械体操をメインに指導していた。学校の部活動とは違う雰囲気の中で、部活動の顧問が指導出来ない専門的な指導を行っていたという自負がある。民間のスポーツクラブで技術向上を図るという選択肢も、生徒と保護者にはあるのだ。しかし大会等に参加した場合、学校の名前での参加ではなく、自身が所属する民間スポーツクラブでの参加となる場合があり、学校というコミュニティから離れてしまうという問題点も存在する。

3. 教員側が抱える問題

次に、学校現場での問題を洗い出してみる。学校現場では教員の「部活顧問がブラックである」業務状況が問題にされ始めている。ただでさえ忙しく、勤務時間も長い教員が半ば強制的に部活動の顧問を担当し、平日の放課後だけでなく、土日も出勤して部活動の指導や引率にあたる現状を「ブラックな職場環境だ」と一部が声を上げたというのだ。2016年4月25日の毎日新聞は次のように報じている。

『昨年12月、若手の教員らが、部活の顧問を引き受けるかどうかの「選択権」を求めてインターネット上のウェブサイトで署名を集める運動を始めたところ、3カ月間で約2万3500人分が集まり、3月初めに文部科学省に届けられた。』

この行動の背景には、学校指導要領における部活動の位置付けの曖昧さや、部活動に対する教員の意欲関心の温度差、前述のような一部のパワハラ的指導が報道される事で発生する部活動顧問全員に対する社会的批判などもある。しかし中高年の世代の教員らには、「部活動は大事な学校教育の一環である」という意識が根強く浸透しており、高等学校も含めて、「部活動がなければ毎日きちんと学校に行っていたかどうか。部活動の為に学校に行っていたようなものだ」と言う人たちは少なくない。私もその一人である。その感覚は、今も何割かの子どもたちには通じている。ところ

が、教員にも「労働者の権利」が重視される世相になり、部活動のような曖昧な存在は正当な奨励の根拠を失いがちになる。毎日新聞は同じ記事の中で、このように伝えている。

『文科省の教員勤務実態調査によると、2006年の時点で部活動顧問を務めていない中学教員は13.7%。「全員顧問制」の学校もある。活動時間はほとんどが放課後や休日だ。文科省の担当者は「一般的に、土曜や日曜に部活動の指導を4時間程度した場合、日額3000円が支給される」と説明する。具体的な支給の要件や額は自治体が条例などで定めている。』

部活動の成果や重要性は認められているものの、前記したように教育課程に位置付けられていない。近年では「サービス残業」というワードが普及したが、教員にとって部活動はまさに「サービス勤務」と言えよう。それでも長年の伝統がある為、部活動を熱心に指導し運営するのは学校の業務として当然というスタンスが保たれてきた。ところが近年では教員の通常業務ますます増加し、勤務時間の長さが問題となっている。加えて労働者の環境やワークライフバランスの確保が社会的に強く認識されるようになり、部活動が厄介な存在に成り下がり、「なければいいのに」と疎まれる存在とまで凋落しつつある。

部活動は学校でなく、「地域のスポーツクラブ等で行えばいい」という主張も高まっている。現状として弘前市内でも水泳や体操、サッカー等の競技で本格的に上位入賞を目指している生徒の多くは学校の部活動ではなく、民間運営のクラブやスクールに所属し、競技力向上を目指すのが主流になっている。野球も同じで、高校野球の強豪校に進学し、プロ野球を目指したいと考えている生徒の多くは、部活動ではなく、スポーツ少年団と呼ばれる地域のチームに所属する。教員側の「部活動顧問はやりたくない」という選択権があるべきだという考えは理解できる。「教員にも適正な勤務時間と労働環境を」という主張も、私の民間企業での勤務経験から賛同できる。しかし、教員は学校の現実をもっと全体的な広い視野で捉える

必要があるのではないか。専門的役割を教員以外の外部が担当する傾向が進む現実の中で、学校の先生は何が出来る存在であるべきか？

不登校やイジメ問題などの相談は「スクールカウンセラー」が担当している。運動・音楽などの部活動は「専門の指導員・コーチ」が外部から派遣されてくる。勉強は教師が教えるかもしれないが、「受験勉強は塾で教えてもらう」と思っている家庭が大多数である。勉強は塾の講師にお願いした方が「成果が上がる」との議論も出始めている。授業まで外部に任せるシステムが生まれたら、教員の存在は不必要になってしまう。

教員は、生徒たちの悩みや現状と向き合う必要もなくなり、部活動を通して生徒に触れ合う必要もなく、進路に関わる受験勉強の責任さえ求められない。一部の生徒や親が、もはやそれを学校の先生に求めていないと言ったら言い過ぎかもしれないが、この事実を教員が自覚したほうがよいと私は思う。現状がエスカレートすると、「先生」ではなくなりかねない。

教員の労働環境を整備するのは重要だが、学校の本質を根本に持たない議論は子どもたちを幸せにしない。部活顧問の強制がブラックだという問題ばかりを部分的に論じることは、いま学校や教員、もっといえば子どもたちが直面している本質的な悩みや課題に取り組む具体的な行動にはならない。やるが多すぎると言うならば、学校業務の見直しが優先課題ではないだろうか。どうして子ども達と直接触れ合え、人間対人間で子供と接し、情熱を注ぐべき学校の教員が教育に不要な存在にならなければならないのか。

神奈川県川崎市で6年間中学校教員をしている、私の親友はこう言う。

「確かに部活動は教育課程の位置付けにない。部活動の顧問は全教員が何かしら担当しなければならないので、断る訳にはいかない。でも、部活動の顧問をする事で他学年の生徒と接する事も出来るし、自分の部活動に、学校生活で問題がある生徒がいる時などは、その生徒が道を外さないようにそばでサポートすることが出来る。負担は大

きいけど、教員から部活動の指導を取ってしまったら、生徒を深く理解することが出来なくなる。」

私も、放課後や土日祝日に、部活動に情熱を傾け、教育課程以外の部分で生徒と一緒に活動する時間を確保する事こそが、教育者としての本質だと考える。前記した、毎日新聞の記事にある若手教員のケースが増えると、「学校の存在自体が不必要ではないか」「子ども達は学校以外の場所に通った方が、よほど人間的に豊かに育つのではないか」といった社会的風潮が起こり、学校そのものの存続が問われる可能性に向かっていくという認識をする必要がある。

結論として、部活動顧問を「ブラック化」し、問題としているのは、教員自身であるのではないだろうか。慣習でやってきた事かもしれないが、先人達が積み重ねた歴史を安易に壊すような動きがあるのは残念でならない。

4. 学校と民間の連携例

弘前市内には各種競技を指導する民間スポーツクラブが多数存在する。器械体操を指導する団体が4つ、水泳を指導する団体が6つと多い。その他スポーツ少年団という形で野球・サッカー等が

各学区に点在している。ここでは、全国約160店舗を運営し、弘前市内にも支店があるC社の学校に対する取り組みを紹介する。C社のメインは水泳指導である。6カ月のベブースイミング指導を始め、技術習得のための習い事としての水泳指導、その上級クラスにあたるエキスパートクラス、選手育成クラス、と指導の範囲は多岐にわたる。

通常クラスの月会費は約7,000円程度で、週1回60分の練習時間となっている。選手育成クラスになると約9,000円で週6回の練習で、曜日によって練習時間が決まっている。

学校の部活動では当然月会費は発生しないが、民間スポーツクラブに会費を払ってまで生徒が通う（保護者が通わせる）のには理由がある。第一に学校の練習環境が整っていない事が挙げられる。弘前市内の学校にあるプールは全て屋外にあり、夏季しか使用する事が出来ない。C社含め民間クラブは屋内プールで、年中室温・水温ともに安定した環境で練習する事が出来る。練習時間も学校で練習する場合に比べ、多くとる事ができる。

次の理由として、教員は基本的な水泳指導は出来るが専門的な知識に乏しい為、生徒・保護者は

表1 市内各社選手コース練習比較

クラブ名	練習回数	練習時間	特徴
Y社	週6回	2時間	・コーチが多い ・夏季は屋外練習を実施
J社	週6回	2時間	・系列でオリンピックメダリストを輩出 ・少人数制のクラス練習
C社	週6回	平日 1時間 土曜 3時間	・定期的に記録会を実施 ・練習時間が少ないため、学業との両立がしやすい
R社	週2回	1時間	・大会での好成績よりも、技術向上の指導がメイン
H社	週6回	2時間	・大会実績のあるコーチを県外から連れてくる ・郊外にあるので敷地が広い

表2 C社の練習日程表

2014年3月				弘前市内のC社			
日	曜日	練習時間	備考	日	曜日	練習時間	備考
1	土	08:00 ~ 10:00 16:00 ~ 17:00	2部練習	21	金	17:00 ~ 18:00	
2	日	OFF	水泳記録会	22	土	07:30 ~ 09:00 16:00 ~ 17:00	2部練習
3	月	17:00 ~ 18:00		23	日	OFF	
4	火	17:00 ~ 18:00		24	月	17:00 ~ 18:00	
5	水	OFF		25	火	17:00 ~ 18:00	
6	木	17:00 ~ 18:00		26	水	17:00 ~ 18:00	
7	金	17:00 ~ 18:00		27	木	17:00 ~ 18:00	
8	土	16:00 ~ 17:00	朝練習なし	28	金	17:00 ~ 18:00	
9	日	OFF		29	土	07:30 ~ 09:00 15:00 ~ 17:00	特別練習
10	月	17:00 ~ 18:00		30	日	7:30 ~ 09:00	特別練習
11	火	17:00 ~ 18:00		31	月	07:30 ~ 09:00 16:00 ~ 18:00	特別練習
12	水	17:00 ~ 18:00	スクールバス 送迎無し	お知らせ			
13	木	17:00 ~ 18:00		○3/2水泳記録会(当クラブ) 当コースの生徒は全員参加願います ○3/29~4/3 特別練習を実施致します。 詳しい内容・参加費は、別紙ご連絡致します。 ◎毎週月・木、練習終了後に陸上トレーニングを 実施致します。 ※主な内容…バランスボール・コアボール・腹筋			
14	金	17:00 ~ 18:00					
15	土	08:00 ~ 10:00 16:00 ~ 17:00	2部練習				
16	日	OFF					
17	月	17:00 ~ 18:00					
18	火	17:00 ~ 18:00					
19	水	OFF					
20	木	17:00 ~ 18:00					

休養日がしっかり取られており、クラブ内の記録会などもあるのでモチベーションの維持にも繋がっている。

表3 ある日の練習メニュー（筆者が過去に作成したもの）

2015年1月8日 9:00~12:00

No	MENU		DISTANCE	REP	SET	CYCLE	SYS	NOTICE	DISTANCE	TIME
1	W-up	IM	800	1	1	16:00	A1	SKPD by200IM	800	16:00
2	Pull	Fr	100	8	1	1:45	EN1	Rev Open	800	14:00
3	Swim	Fr	100	10	1	1:45	EN2	withPad	1,000	17:30
4	Swim	Fr	200	6	1	3:15	EN2		1,200	19:30
	Easy	Cho	100	1	1	6:00	A1	easy swim・toilet time	100	6:00
5	Round	Fly	50	5	3	1:10	EN3	1s:Kick 2s:Pull 3s:swim	750	17:30
		Ba	50	5	3	1:10	EN3	1s:Kick 2s:Pull 3s:swim	750	17:30
		Br	50	5	3	1:20	EN3	1s:Kick 2s:Pull 3s:swim	750	20:00
		Fr	50	5	3	1:10	EN3	1s:Kick 2s:Pull 3s:swim	750	17:30
	Down	Cho	300	1	1	10:00	A1	100Kick 100Drill 100Free	300	10:00
									0	0:00
									0	0:00
									0	0:00
									0	0:00
									0	0:00
									0	0:00
									0	0:00
A1	有酸素	アップ・ダウン				16.7	A1	1200	Fr	3750
EN1	基礎的持久トレ	フォーム				11.1	EN1	800	Ba	750
EN2	持久・有酸素ハーフ	持久力				30.6	EN2	2200	Br	750
EN3	過負荷持久(無酸素)	心肺向上				41.7	EN3	3000	Fly	750
AN1	耐乳酸	乳酸除去・スピード				0.0	AN1	0	IM	800
AN2	乳酸生成	乳酸限界・スピード				0.0	AN2	0	Sl	0
AN3	パワートレ	筋力・神経反応				0.0	AN3	0	Cho	400
TOTAL						100.0 %		7200	TIME	2:35:30

一見何を書いているのか分からない。専門用語が並んでいるが、選手コースの生徒は理解して練習に臨んでいる。

専門的な指導ができるコーチを求めて民間スポーツクラブに通う（通わせる）のである。

競泳はタイムが全てであるので、タイムが縮まらない場合、現クラブを退会し、別のクラブに移籍する事も多々ある。ここまでの流れだと、一方的に民間企業が主導しているように思われるかもしれないが、きちんと学校との連携は図っている。

中体連やインターハイ予選などの大会に参加する場合、所属はスポーツクラブ名ではなく、学校名で参加するのである。クラブ側はコーチが会場に足を運び、ウォーミングアップやコンディショニングを行う。タイムを測定したりレース後のアドバイスもコーチが行う。

学校側からは顧問が会場に来場し、選手のレースエントリーを行う（参加費納入、顧問会議参加など）。顧問が会場で行う業務はコーチから選手の状態の申し送りを行った後、応援席で自校の選

手の応援をするだけである。顧問は時間的な拘束はあるが、難しい専門的な指導をすることもなし、ブラックな指導を行う可能性も皆無である。生徒は顧問とコーチが会場にいる事で安心してレースに臨む事が出来るので、学校と民間の連携がうまくとれているパターンであると言えよう。C社の場合、生徒から頂戴する月会費以外、学校側から現金をもらう事はない。別の民間クラブでは貰っている所もあるので、学校側にとっては痛い出費となる場合もある。

また、ジュニアオリンピック予選などの学校と関係ない大会に参加する場合は、所属名がクラブチームになるので、顧問は何もする必要が無く、生徒が個人的に参加している形式になるので、学校の負担もない。

5. 結論

前項では水泳指導を例に挙げたが、いろいろな競技で学校と民間の連携は可能であると考えられる。費用の面などの問題はあっても、生徒・保護者側、教員側双方にとって、問題解決に繋がるのではないだろうか。生徒・保護者側にとってはブラックな指導を受けることも無くなる。教員にとっては専門的ではない知識を使って部活動の指導をすることが減るので、他の業務に注力することが出来る。顧問として全く活動しない訳ではないので、生徒との繋がりが切れることはない。また、民間側にとっては通う生徒が増えることで利益を挙げることに繋がるので、3者にとって不都合は無いように思われる。このビジネスモデルを実現すべく、スポーツ指導者の新たな国家資格制度を創設する構想が浮上している。実現すれば教員の負担が減り、民間スポーツクラブの参加推進により、活性化が期待される。制度が定着すれば、現役を引退したトップアスリートが資格を取得して指導する事も可能になる。政治の面では、2020

年の東京オリンピックを見据えて、議員立法で国会提出を目指す動きが始まっている。公的な資格を持った指導者が部活動を指導する事で指導力や責任が明確になり、保護者の安心感にもつながる事が期待される。

このようなビジネスモデルを、我々高等教育機関でも行うことは出来ないだろうか。今後の課題として検討していきたい。

<参考文献>

- ・2016年8月1日 NHKにて放映
クローズアップ現代プラス
『「死ね！バカ！」これが指導？～広がる“ブラック部活”～』
- ・毎日新聞 2016年4月25日朝刊

<協力>

- ・市内民間スイミングスクール